

他者軽視傾向が孤独感に与える影響

田向 俊輝

本論文では、他者軽視傾向が孤独感に与える影響とそのプロセスモデルについて検討している。1章では他者軽視傾向について概観した。他者軽視傾向とは、「他者の能力を批判的に評価、軽視する傾向」であり、人が「有能でありたい」という基本的な欲求を満たそうとする際に見られる傾向である。この他者軽視傾向を持つ者は周囲の人間に対し不満を持ちやすいと仮定し、対人関係における不適応の指標として孤独感を挙げ、これを他者軽視傾向が促進するという仮説を立てた。これまでの研究において他者軽視傾向と孤独感の関連はほとんど検討されておらず、特に他者軽視傾向がどのようなプロセスを経て孤独感に影響を与えているかに関する研究は見られない。そこで2章では、他者軽視傾向と孤独感の関係を明らかにすることを目的として、質問紙調査による検討を行った。他者軽視傾向と孤独感の媒介として信頼感と共感性を想定したモデルを作成し、共分散構造分析を行った結果、十分な適合度が得られ、仮説が支持された。

3章では、2章で得られたモデルに基づき、信頼感が他者軽視傾向と孤独感の関係を考える上で重要な概念となっていると予測し、他者軽視傾向から他人への信頼への影響の促進要因を検討した。本研究では、他者軽視傾向が孤独感に与える正の影響の促進要因として二分法的思考を想定し、質問紙調査を行った。回帰分析によって、他者軽視傾向と二分法的思考の交互作用が信頼感に及ぼす効果を調べた結果、いずれの下位尺度においても交互作用は有意でなかった。原因として、質問紙の構成により、被調査者が社会的に望ましい回答を行いがちになっていたことが考えられた。

4章では総合考察が行われた。他者軽視傾向は孤独感を高めており、他人への信頼と他者指向的共感性の低下がそれらの媒介として働いていた。ただし、本研究において、他者軽視が孤独感に与える影響に二分法的思考がどのように関わってくるかは明らかにされず、今後の課題とされた。以上の知見は、対人領域における不適応の観点から、今後他者軽視傾向に関する研究を行う上で一定の指針になるものと結論づけられる。

高校教師の語りからみる生徒とのかかわりとその背景

— 教師—生徒間のかかわりの変化に着目して —

對馬 恵美

教育現場では教師—生徒の確固とした信頼関係の構築が必要とされている。本研究では、高校教師の生徒とのかかわりとその背景について、教師の語りをもとに整理することを目的とし、7名の高校教師を対象に2度にわたる半構造化面接を行った。

分析1では教師—生徒間のかかわり方とその背景要因と考えられるものの枠組みを見出した。その結果、生徒とのかかわりについては《強制的》・《教示的》・《同質的》かかわりと《見守り》に、かかわりの理由については“教師側の理由”、“生徒側の理由”、“周囲の理由”、“学校・校風の理由”に分類された。さらに分析2では、生徒とのかかわりとその理由について分析した。その結果、日常場面では《強制的》・《教示的》・《同質的》かかわりが多くみられ、個別対応場面においては《強制的》・《教示的》かかわりのみみられた。分析3では、生徒とのかかわり方とその理由を事例ごとに時系列に分析した結果、生徒とのかかわりは様々な背景を理由として主に着任する高校によって変化しており、特に初任校での《同質的》かかわりでは教師の若さ・未熟さ、教師自身の性格、教師の持つ信念、生徒との距離が、勤務年数を重ねた後の《教示的》かかわりでは生徒の関係形成の難しさと生徒の反抗的態度が影響を与えていたことが示唆された。さらに分析4では、かかわりの転換期の傾向に着目し、《同質的》から《強制的》かかわりへ、そして《強制的》から《教示的》かかわりへの変化が全体的傾向としてみられた。その背景には、前者には教師の未熟さや教師としての立場の変化が、後者には学校への適応と生徒像の理解や、失敗経験からの軌道修正が影響していた。

以上のことから、教師は複数のかかわりを同時並行的にとっていること、ほとんどの事例では《同質的》から《強制的》、《教示的》へと移行していくことが示された。教師としての経験と生徒とのかかわり方の試行錯誤が、生徒の立場に立ったかかわり方を安定してとるための土台となっていることが明らかとなった。